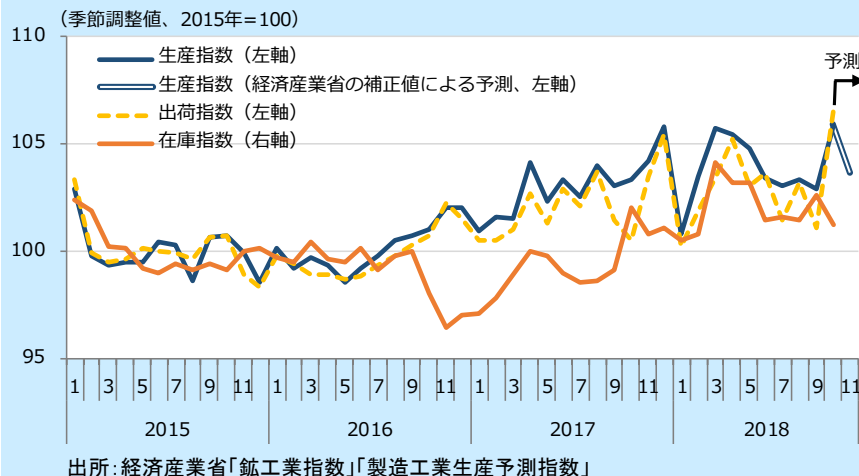


日本：鉱工業生産指数（2018年10月）

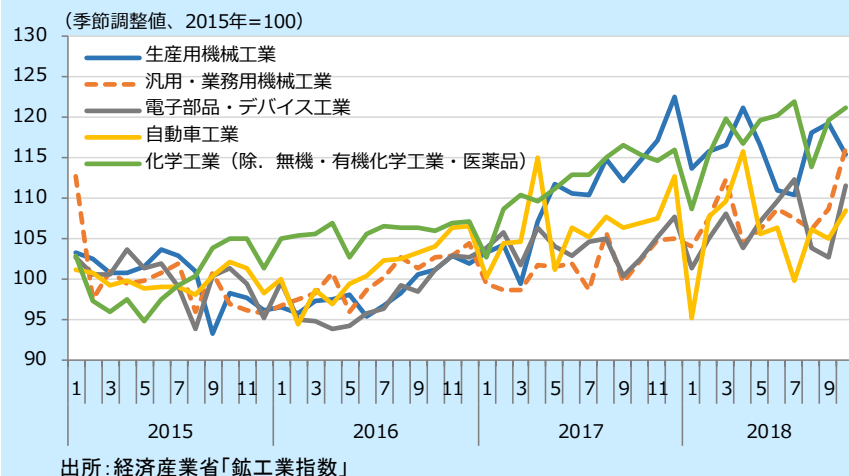
—自然災害の悪影響が剥落し、生産は大幅に増加—

MRI Daily Economic Points
November 30, 2018

鉱工業指数（生産・出荷・在庫）



変動への寄与が大きい業種の生産指数



評価ポイント

今回の結果

- 10月の鉱工業生産指数(速報)は季調済前月比+2.9%と2ヶ月ぶりに上昇。
- 業種別にみると、15業種のうち13業種が前月比で上昇した。9月の関西国際空港の一時閉鎖によって出荷が抑制されていた電子部品・デバイス工業(同+8.6%)は、その反動増により大幅に上昇。堅調な汎用・業務用機械工業(同+6.9%)が高い伸びとなったほか、鉱工業生産に占めるウェイトが約15%と大きい自動車工業(同+3.1%)も上昇し、全体を押し上げた。
- 一方、生産用機械工業(同▲3.1%)は3ヶ月ぶりに低下。18年以降、生産用機械工業は、輸出の鈍化を背景に、生産の伸びが低下傾向にある。
- 在庫指数は前月比▲1.4%と2ヶ月ぶりに低下した。自然災害による物流の停滞の悪影響が和らぎ、出荷が同5.4%と大幅に増加したことが、在庫の減少につながったとみられる。
- 製造工業生産予測調査によると、11月の生産は前月比+0.6%の上昇が見込まれている。しかし、予測値に対する実績値の平均的なズレを経済産業省が補正した値によれば、同▲2.1%程度の低下となる。
- なお、10月より過去系列も含めて基準改定後の値が公表され、指数の基準時やウェイト算定年次、業種分類などが変更されている。

基調判断と今後の流れ

- 生産は、2018年以降の輸出の伸び低下などを背景に、回復に一服感がみられる。先行きは、国内では所得環境の改善による内需回復が見込まれるものの、外需はやや減速傾向にあることから、緩やかな回復にとどまるだろう。
- 生産の下振れリスクとしては、①米国の保護主義化に端を発する世界貿易・経済の下振れ、②早ければ2019年1月にも開始される見通しの日米物品貿易協定(TAG)の交渉の行方、などに注視する必要がある。